

# 光源氏と母なるもの

——その成長過程をめぐって——

加藤 義彦

『源氏物語』は、古くは『光源氏物語』あるいは単に『光源氏』とも呼ばれたが、その名高い冒頭部は、

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。<sup>(1)</sup>

(桐壺・一七頁)

と、主人公光源氏の母桐壺更衣に関する記述から始まる。この一文について鈴木日出男氏は、「後続の物語をどう展開させるかの重要な動機がふくまれているように思われる」と指摘している。また「桐壺」巻自体も以後の物語の発展の源流をなすとされ、細密な構成のもとにある『源氏物語』において桐壺更衣をもって物語が始発することは重要な意義を担っていると考えられる。

その桐壺更衣は、桐壺帝によって唐の楊貴妃と比較され、次のように語られている。

A 絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにか

よひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかほさむと契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽させずうらめしき。

(桐壺・三五頁)

「いとほひやかにうつくしげなる」(同・二二頁)更衣の姿は、「芙蓉は面の如く柳は眉の如し」(「長恨歌」という楊貴妃の容色を凌ぎ、いかなる花の色にもよそえることができぬ美しさであったとされる。というのもそのような更衣の美しさは、「なつかしうらうたげなりし」、「あはれに情ありし御心」、「心ばせのなだらかにめやすく憎みがたかりし」(桐壺・二五頁)という更衣の人柄が醸し出すものでもあったからである。かつ父大納言から入内するべく育てられた更衣は、「御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりし」(同・二六〇七頁)とあるように、宮仕えするのに理想的な人物として成長する。しかし、この理想性と裏腹に更衣は、後見の不安定さと後宮の敵対者達の迫害により、「いとあつしくなりゆき、

もの心細げに里がちなる」(同・一七頁) 状態を抱え込む。けれども、この更衣の苦境がかえってさらなる帝寵につながり、更衣は「後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身に在り」という楊貴妃さながらの寵愛を受けることになる。そして右の波線部に見えるように、二人は「天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん」と詠まれた玄宗皇帝と楊貴妃の如く愛を誓い合つたのであつた。ただ、このような桐壺帝の桐壺更衣に対する限りなき寵愛は、逆に他の女御・更衣の桐壺更衣に対する想像を絶するほどの迫害を含蓄する。この氣も狂わんばかりの嫉妬や憎悪の渦巻く中で、「玉の男御子」として出生したのが光源氏であつた。そして、桐壺更衣の母北の方によつて、「あらし風ふせぎしかげ」(桐壺・三四頁)と詠まれてるように、幼い若宮(光源氏)にまで及んだ迫害から若宮を懸命に護ろうとしたのはおそらく母桐壺更衣ただ一人であつた。何心なく見上げる若宮の心にこの母の姿が深く刻まれたものと思われる。また、桐壺帝と更衣の悲恋の詳細な描写とは対照的に、更衣と若宮の母子関係について具体的な叙述がほとんどみられないことにも注意されるのである。

## 二

この桐壺更衣の理想性を受け継ぐ女性が、言うまでもなく、更衣と比較して「御容貌ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる」(桐壺・四二―三頁)という藤壺の宮である。そして更衣と瓜二つの藤壺に対して帝寵も次第に移っていくのであるが、これは裏を返せば

桐壺更衣に対する帝の愛情がいかに深いかを物語つてもいる。他方、源氏の方も藤壺に対して幼いながらほのかな恋心を垣間見せる。

B 源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方はえ恥ぢあへたまはず、……いと若うつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と典侍の間こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に參らまほしく、なづさひ見たてまつらばやおぼえたまふ。

(桐壺・四三頁)

しかし、源氏の藤壺恋慕に根底的な影響を及ぼしたのは、右の引用の後半部分に見える典侍をはじめとする帝や更衣に近侍していた人々の証言であり、さらに決定づけたのは他ならぬ父桐壺帝の、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」(桐壺・四四頁)という藤壺を源氏の母代りとする発言である。ここで帝は源氏の藤壺思慕を容認しており、源氏元服後には淑景舎(桐壺)や改修した二条院を源氏に使わせている。この帝の発言について『湖月抄』所収の師説に「此御ゆるしの詞より終に源氏此宮と通じ給へり」とあるように、帝の更衣に対するあくなき恋慕が源氏に道を誤らせる遠因となつたのである。しかしながらこの帝の発言には、源氏を愛育すべき更衣を失つた無念から「藤壺を光源氏の母になぞらえ……あらまほしき母子の姿」をそこに認めようとする帝の悲願が

存在することも見逃せ<sup>(4)</sup>ない。他方、源氏の側からすれば、自己に内在する衝動が確固たる対象を与えられたことを意味している。ここに藤壺は、桐壺更衣の理想性を受け継ぐ母として源氏に關係することになるのである。

これらに加え、二人の拠つて立つ背景も両者の結びつきを一層強める。すなわち、六歳時に祖母(母北の方)とも別れた源氏は、「このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ」(桐壺・三八頁)とあるように、二条院における精神的な支えを喪失し、後に自ら「言ふかひなきほどの齡にて、睦ましかるべき人にも立ちおくれはべりにければ、あやしう浮きたるやうにて年月をこそ重ねはべれ」(若紫・二一八頁)と述べる状態に陥る。他方、藤壺は、入内に頑強に抵抗した母后がなくなると、兄兵部卿宮が「かく心細くておはしまさむよりは、内裏住みせさせたまひて、御心も慰むべく」(桐壺・四二頁)と考えて入内を勧め、藤壺は桐壺帝の皇女扱いで入内することになる。互いに後見がなく孤立し、姉弟のような藤壺と源氏の關係は、従姉弟の關係に当たる雲居雁と夕霧の幼恋のように二人を一層結びつけたのである。実際、二人は『新編全集』が指摘するように、管弦の遊びの折々に心を通わせ(「琴笛の音に聞こえ通ひ」、かつ源氏は藤壺に対し、花鳥風月に事寄せてその心ざしのほどを伝えたのである。この母のようであり、また姉のようでもある藤壺に対する源氏の恋は、鈴木日出男氏が指摘したように<sup>(5)</sup>、神話上のアマテラスとスサノオの關係を彷彿とさせる。神代記でスサノオは、母イザナミを慕つて青山を枯山になすほど泣き惑い、父イザナキによつて

追放されてしまふ。暇乞いのために高天原に上つたスサノオはアマテラスと誓約をするが、杉浦一雄氏は誓約神話での物実によるアマノオシホミミ誕生を、藤壺と源氏の密通の末の冷泉帝誕生に当たるものと見て取っている<sup>(6)</sup>。そして、スサノオが慕うイザナミを桐壺更衣に相当すると考えるならば、桐壺帝はイザナキに当たるわけであり、『源氏物語』の始発部において桐壺帝と桐壺更衣はいわば天父地母の役割を原型として担っているのである。日本神話においてイザナミはイザナキの愛する妻であり、かつ国生みの母であると同時に、イザナキの黄泉国訪問にみられるような恐ろしい一面をも内包している。この恐ろしい面を桐壺更衣とは正反対に、右大臣の盤石の後見のもとに最も早く入内し、「いとおし立ちかどかどしき」性格の持ち主である弘徽殿女御が担っているのではないだろうか。実際、弘徽殿女御は、藤壺の母后から、「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺更衣のあらはにはかなくもてなざれにし例もゆゆしう」(桐壺・四二頁)と、忌避されるほど恐れられている。すなわち、漢の呂后に比される弘徽殿女御は、源氏にとっていわば慈母藤壺と一对の恐ろしい母(継母)として対峙することになるのである。

他方、帝は、若宮(光源氏)が生まれた当初から「私物」として明け暮れかわいがり、祖母の母北の方がなくなつた後にはつきつきりで保護し、節目節目の人生儀礼を一の宮(後の朱雀帝)以上に催すなどして東宮候補として後押しする。しかし、右大臣家強勢の中、帝は若宮に外戚のないことを不安に思い、東宮に立てることを断念

し、なまじ弘徽殿女御の猜疑の対象となる無品親王にするよりも、漢学を習得させて実務官僚とする方が後々若宮のためになると考える。こうして、若宮は臣籍降下して源姓を賜ることになる。源氏十二歳の元服の際にも、帝は東宮の元服式以上に盛大に執り行ったのであるが、その宴席上で源氏は親王達の末席に座らざるをえず、帝に拝舞した源氏の姿は同席した人々の落涙を誘う。そして、このサノオの「神やらひ」に相当する天上の世界からの離脱によって、光源氏は以後「魂の落ちつき場所を持ちえ」ぬ生涯を送ることになる<sup>(8)</sup>。式場で加冠の役を務めた左大臣が帝に変わって源氏の後見役となり、当夜に左大臣の邸に迎えられた源氏は葵の上と結婚し、これによって藤壺の御簾の中に入ることはできなくなってしまう。すなわち、源氏にとって神話的な天上世界からの追放はまた藤壺という母なるものとの遮断を意味していたのである。従って、藤壺は源氏にとって天上の母のような存在であるともいえるであろう。

### 三

盛大に左大臣家に迎えられた光源氏ではあるが、更衣の忘れ形見である源氏を帝は離さず、同じく「限りなき御思ひどち」である藤壺のもとで管弦の遊びを催す。藤壺を無上の女性と慕い、このような女性こそ妻にしたいものだ<sup>(9)</sup>と渴仰する源氏も、当然宮中生活の方が好ましく感じられる。他方、東宮妃たるべく大切に育てられた左大臣の一人娘葵の上は、左大臣が東宮の入内要請を断って源氏と結婚したわけであり、心が藤壺の方ばかりを向いている年下の源氏と

の結婚生活は失望以外の何物でもなかったのである。しかし、正妻が桐壺帝の妹宮であった左大臣は源氏を迎えることによって帝との結びつきをより強固なものとし、その勢威は右大臣家を圧倒する<sup>(9)</sup>。けれども、源氏と葵の上の側からすればこのような結婚生活がうまくいくはずもなく、源氏の足は次第に左大臣邸から遠のき<sup>(10)</sup>、更衣と同じく中の品の空蟬や夕顔といった女君と邂逅することになる。姥沢隆司氏はこの中の品体験を藤壺の「形代追求の試行過程」と見て取っているが、これを「母のおもかげを多くの女性のなかに求めてゆく」源氏の母思慕の観点からみれば、源氏は無意識のうち二人の中に母に似た孤独の影を認め、それが源氏の無意識の共感と呼んだのである。

これに対し、源氏を下にも置かずかしく左大臣は、自邸を「いと玉の台に磨きしつらひ」(若紫・二二六頁)、管弦の遊びを催すなどして源氏の心をつなぎとめようとする。しかしこの左大臣の姿勢が示唆するように、当の葵の上は、源氏に対し「とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる」(帚木・九一頁)といった様子から、「世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさる」(若紫・二二六頁)、「例の、しづしづに心もとけずものしたまふ」(同・二五二頁)といった状態になってしまふ。ただ、ここで注意されるのは、源氏に対するこうした拒絶的な姿勢には、「たへがたうわづらひはべりしをも、いかかとだに問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれ」(同・二二六頁)という冷淡な態度も含まれており、このような態度は決し

て葵の上本人に留まらず、政略結婚を成立させた左大臣家に内在するものであったということである。こうして源氏は、夕顔の隠れ家に対し「ものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思はしなせば、玉の台も同じことなり」(夕顔・一三六頁)と感じ、自らも「行きかかづらふ方もはべりながら、世に心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ」(若紫・二一四頁)と述べるようになる。一方、こうした源氏の結婚を逆の側から見ると、右大臣家の強勢を押さえるために左大臣家と姻戚関係を結び、かつ類い稀な才の持ち主である光源氏は臣籍降下して皇室の固めとするという、桐壺帝と源氏の親子を越えた関係も、「孤児同然」<sup>(13)</sup>の源氏を苦しめることになったのである。そして何よりも、源氏が恋慕すればするほど妃としての立場からうち解けない態度を取らざるをえない藤壺との関係が、源氏の「心づくしに思し乱るる」(夕顔・一四六頁)精神状態を惹起し、「若紫」巻冒頭の源氏の瘡病へとつながっていくのである。

瘡病にかかり、ひどくやつれた源氏は秘かに北山の聖のもとを訪ね、聖から加持祈祷を受け、自らも看経をして過ごす。「もの思ひに病づく」(若紫・二二三頁)という当時の通念から、供人達は源氏の気を紛らわすために、「はるかに霞みわたりにて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれる」(同・二〇二頁)春の景色を見せ、諸国の名所の話、ひいては明石の君の噂話をすることによって源氏的气质も次第に快方に向かつていく。いよいよ明日都に帰ろうとする源氏が、北山の風流な僧坊の小柴垣の傍らに立つて垣間見した際に

見出したのが紫の上であった。

Cつらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

(若紫・二〇七頁)

源氏が都を出て北山を分け入った時の様子は「京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて……」(同・一九九、二〇〇頁)と語られているが、まさにその北山の桜花を思わせる少女紫の上に目をとめた光源氏は落涙してしまう。この場面と光源氏が藤壺をほの見た場面(前の引用B)の傍線部・波線部等が照応しているとみられ、右の場面は藤壺瞥見の再現とも思われる。このことから明らかのように、源氏落涙の原因は、「いとつくしかりつる見」(若紫・二〇九頁)紫の上が源氏の常に恋慕する藤壺によく似ていたからであり、実際、両者は藤壺の母后譲りの「にほひやか」な美質を備えた女性なのであった。藤壺そっくりの紫の上に源氏は屈折した恋心を抱くが、小西甚一氏が指摘した通り<sup>(14)</sup>、その背後に源氏は無意識のうちに母桐壺更衣の姿を感じ取っていたとみられる。けれども、源氏落涙の原因はこれにとどまるものではなく、垣間見時のいかにも幼い紫の上の行動に対し、「ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」(若紫・二〇八頁)と語って涙を流す尼君を見て、「すずろに悲し」(同頁)と感じる光源氏的气质が一層紫の上への共感をかき立てたのである。



紫の上に強く心引きつけられた源氏は、「あやしきことなれど」といつつ、尼君の兄の僧都に紫の上を所望するが断られてしまう。再び気分が悪くなった源氏が僧坊で横になっていた際の心情は次のように語られている。

D君は心地もいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひややかに吹ききたるに、滝のよどもまさりて音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずるなる人も所がらものあはれなり、まして思しめくらすこと多くて、まどろまれたまはず。初夜といひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息にひき鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひあてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中をすこしひき開けて、扇を鳴らしたまへば、……「あやし。ひが耳にや」とたどるを聞きたまひて、「仏の御しるべは、暗きに入りてもさらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声のいと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも恥づかしけれど、「いかなる方の御しるべにかは。おほつかなく」と聞こゆ。「げに、うちつけなりとおほめきたまはむもことわりなれど、

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬと聞こえたまひてむや」とのたまふ。(若紫・二一五―六頁)

源氏はこの後、尼君にも紫の上所望の旨を伝えるが拒絶されてしまう。その直後に源氏は「吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす

滝の音かな」(同・二一九頁)と詠んでいる。これは右の場面の「雨すこしうちそそき……滝のよどもまさりて音高う聞こえ」周囲の情景をも踏まえたものであり、この涙が右の詠歌で「旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」と表現され、その冷え冷えとした心情が「山風ひやかに吹ききたる」と語られている。さらに、この春夜の深まり行く情景が、「冥より冥に入りて、永く仏の名を聞かざりしなり」〔法華経〕卷三・化城喻品〕を受けた和泉式部の詠歌「暗より暗道にぞ入ぬべき遙に照せ山の端の月」(拾遺・哀傷)さながらに、「仏の御しるべは、暗きに入りてもさらに違ふまじかなるものを」という源氏の呼びかけを導く。そしてこの源氏の心の闇は、「面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど」(若紫・二二八頁)という紫の上に対する執心から、「あくがれまど」うほどの藤壺恋慕へと転じることよって、密通直後の場面とほとんど重なってくるのである。

E宮も……いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしううたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思さるる。何ごとをか聞こえつくしたまはむ、くらぶの山に宿もとらまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になし  
ても

思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の君  
ぞ、御直衣などはかき集めもて来たる。(若紫二二三―二頁)

右の引用(E)の二重傍線部が前の引用(D)の二重傍線部と照応  
しているとみられる。個々の表現で言えば、「仏の御しるべは、暗  
きに入りても……」(D)は「くらぶ(暗部)の山に宿もとらまほ  
しげ」(E)に転じている。鈴木日出男氏がこの「くらぶの山」に  
ついて、「仏教にいう無明長夜の闇、すなわち人間の救済されがた  
い煩惱のイメージも含まれていないだろうか。禁じられるべき恋と  
は知りつつもついに逢瀬に進み出て行かざるをえない人間の抑えが  
たい情念こそ、最大の煩惱苦である。夢のような非日常の時空が、  
もう一つの時空としての、絶望的な無明の世界と同一の通路でつな  
がっている趣である」と指摘しているように、右の場面では「冥よ  
り冥に入りて」という無明長夜が、「尽きもせぬ心の闇にくるるか  
な雲居に人を見るにつけても」(紅葉賀・三四八頁)という恋の惑  
いの闇からさらに奥深い闇へと迷い込まんとする無意識の情念構造  
を形成している。これは世間並みの思慮分別などでは如何とも抑え  
がたい源氏の情念の闇を示しているが、その闇はまた、「わが来つ  
る方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散るとまがふに」(古今・  
秋下・敏行)という、母喪失による底知れぬ不安に起因する心の闇  
と表裏一体の関係にある。それゆえに源氏は、「わが恋にくらぶの

山の桜花間なく散るとも数はまさらじ」(古今・恋二・是則)さな  
がらに、「山桜」のような少女紫の上とそのゆかりの藤壺(16)へますま  
す執心していく。さらに、右の場面で源氏に映じた藤壺像(「なつ  
かしうらうたげ」)の根底には桐壺更衣像(前の引用Aの傍線部)  
が存在しているとみられる。そのような藤壺に対し、実存の闇に衝  
き動かされ、歌を詠みかけてむせび泣く源氏と、その姿をいたわし  
く思つて返歌を詠む藤壺との間には母子の姿も認められよう。そし  
て、自身の類いなき「憂き身」を見つめて思い乱れつつも、なお源  
氏に向けられた藤壺の慈愛のまなざしはまた、源氏幼年期の桐壺更  
衣のまなざしと重なっているように思われる。

#### 四

しかし、藤壺はこの密通後、源氏の子を宿したことにより罪の意  
識におののき、それまでごくまれに取り交わしていた源氏との手紙  
のやりとりすら断つてしまう。他方、紫の上の方はといえば、源氏  
が何度世の常ならぬ「まめやか」な気持を訴えようとも、尼君側  
には単なる「いまめかし」き「御すき事」としか思われず、ますます  
源氏に対する態度が硬化してくる。さらに、病状が悪化した尼君は  
再度北山の僧坊に赴き、ここに紫の上とのつながりまで断たれた源  
氏は、紫のゆかりを思つて独詠(「手に摘みていつしかも見む紫の  
ねにかよひける野辺の若草」)せざるを得ない状況に追い込まれる。  
小町谷照彦氏は「源氏物語」の独詠歌について「登場人物の直面し  
ている状況が何らかの閉塞性を示している場合に多く見られ」と

指摘して<sup>(18)</sup>おり、藤壺・紫の上に対して向けられた源氏の心が行き場を失った状態で朱雀院紅葉賀が行われることになるのである。

F 源氏の中將は、青海波をぞ舞ひたまひける。……入り方の日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、

同じ舞の足踏面持、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれるなるに、帝涙をのごひたまひ、上達部親王たちもみな泣きたまひぬ。詠はてて袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思して、

「神など空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまじと思すに、夢の心地なむしたまひける。 (紅葉賀・三二一―二頁)

右は、藤壺を桐壺更衣の身代りと考え帝が、本番を見ることができない藤壺のために、源氏の晴れ姿を母として見守ってほしいという気持ちもあって催した試楽の場面である。その席で帝は、立坊がかなわなかった光源氏の見事な舞を見て涙を禁じ得ない。また源氏との複雑な関係に置かれていた藤壺も、源氏の舞を「立ちぬにつけてあはれ」(同・三二三頁)と見ている。これは対照的なのが東宮の母である弘徽殿女御であり、「神など空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」と悪口している。これは、「容顔美麗なる人は山神のとる程にとれかし」(孟津抄)、すなわち神隠しにあつてしまえ、

と罵つているのである。しかし、このような源氏の光り輝く姿と弘徽殿女御の刺すような視線は右に始まったことではなく、そもそも「玉の男御子」としての出生当初からして、母更衣が「楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれ」(桐壺・一八頁)という状況下に置かれていたのであり、また世人が源氏を「光る君」と呼んだ頃には、弘徽殿女御は藤壺憎しが高じて源氏に対しても「もとよりの憎さも立ち出でてものし」(同・四四頁)と思つていたのである。『新編全集』は、源氏の類い稀なる容姿・才について、「武士仇敵たりともほほえませ、幼くして女も恥じらう美貌、学問遊芸の能力。若宮は成長するにつれて超人的な素質を魔性のごとく発揮する」と指摘しているが、源氏はその背負う影・心の闇が深まれば深まるほどその輝きもいや増すという構図になつていたのである。北山で源氏が琴の琴を奏でた際にも、「たぐひなくゆゆしき」源氏の姿が「この世のものとおほえたまはず」と語られているが(若紫・二二三―四頁)、源氏の瘡病のもう一つの原因は、北山の聖が「御物の怪など加はれるさまにおはしましける」(同・二〇五頁)と述べているように、「物の怪」によるものであった。そして源氏の瘡病と前後して藤壺も病のため宮中から退出しており、藤壺の出産時には弘徽殿女御の呪詛が発覚していたのである。藤壺が悪阻の苦しみを物の怪のせいにしても誰一人疑う者がいなかったことから、弘徽殿女御は頻繁に源氏と藤壺を呪詛していたことが推定される。このような不吉な影を背負った本番の朱雀院紅葉賀での源氏の舞は、「青海波のかかやき出でたるさま、いと恐



ろしきまで見」え、「そぞろ寒くこの世のこととおぼえず」とい  
う恐ろしいほどの舞姿であったのであり（紅葉賀・三二四―五頁）、  
「空のけしきさへ見知り顔なる」と神までが感応して涙を流したの  
であった（「けしきばかりうちしぐれ」）。すなわち、紅葉賀での源  
氏の舞は、桐壺聖代を讃える源氏入魂の舞であるが、それは母なる  
ものの喪失による「世に知らぬ乱り心地」（同・三三三頁）の中で  
舞われたものであった。秋山虔氏は、源氏の藤壺に対する「ほとん  
ど狂気に駆り立てられて行く言動が物語の世界を推進する」と指摘  
しているが、まさに光源氏は、藤壺立后も暗示される中で、日常的  
な理性などでは押さえつけることのできない情念と狂気に衝き動か  
されて紫の上強奪へと向かうのである。

G手をとらへたまへれば、うたて、例ならぬ人のかく近づきたま  
へるは恐ろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひてひき入  
りたまふにつきてすべり入りて、「今は、まろぞ思ふべき人。  
な疎みたまひそ」とのたまふ。乳母、「いで、あなうたてや。  
ゆゆしうもはべるかな。……」とて、苦しげに思ひたれば、  
「ざりとも、かかる御ほどをいかがはあらん。なほ、ただ世に  
知らぬ心ざしのほどを見はてたまへ」とのたまふ。

霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり。「いかで、かう人少な  
に心細うて、過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、いと見  
棄てがたきほどなれば、「御格子まゐりね。もの恐ろしき夜の  
さまなめるを、宿直人にてはべらむ。人々近うさぶらはれよか  
し」とて、いと馴れ顔に御帳の内に入りたまへば、あやしう思

ひの外にもとあきれて、誰も誰もゐたり。乳母は、うしろめた  
なうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきほどならねば、  
うち嘆きつつゐたり。若君は、いと恐ろしう、いかならんとわ  
ななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思した  
るを、らうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御  
心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひた  
まひて、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどす  
る所に」と、心につくべきことをのたまふだけはひのいとなつか  
しきを、幼き心地にも、いといたうも怖ぢず、さすがにむつか  
しう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。

夜一夜風吹き荒るるに、

（若紫・二四三―五頁）

右は按察大納言邸で源氏が紫の上と一夜を過ごした場面であるが、  
この場面では、紅葉賀での源氏の舞の場面と同じように、「うたて」  
「ゆゆし」「恐ろし」「そぞろ寒げ」という語が用いられ、さらに  
「あやし」「むつかし」という語も用いられている。また、この後に  
二条院に引き取りに来た源氏を「あやし」「おそろし」と感じた紫  
の上に対し、源氏は「あな心憂。まろも同じ人ぞ」といつているか  
ら（若紫・二五四―五頁）、一連の場面で源氏は寒気を催させるほ  
どの尋常ならざる（もの）のように描かれているとみられる。「い  
とすごげに荒れたる所」↓「霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり」  
↓「夜一夜風吹き荒るる」↓「風すこし吹きやみたる」という右の  
大納言邸を取り巻く刻々と変化する状況は、まさに母なるものを渴  
仰する（もの）としての源氏の慟哭が紫の上とうち添うことによつ

て徐々に収まつてきたことを示している。「帚木」巻でも、桐壺更衣と似た背景をもつ空蟬が、寝所の傍らに佇む源氏を「もの恐ろし」と察知し、迫る源氏に対し「物におそはるる心地」がした空蟬は畏怖の声をあげている（九八〜九頁）。「夕顔」巻では、ひっそりとした深夜に訪れる源氏に対して夕顔が、「昔ありけん物の変化めきて、うたて思ひ嘆」き、「なほあやしう、……もの恐ろしくこそあれ」と述べている（一五三〜四頁）。この部分には三輪山神話が踏まえられており、源氏は三輪山の神である大物主神と重ねられているわけである。古代においては神は善悪両面をもつから、神の望ましい方面が紅葉賀の源氏の光り輝く姿として現れ（引用Fの二重傍線部）、もう一方の怪異な面が、紫の上強奪へといたる場面で「あやし」「むつかし」「むくつけし」と描かれ、特にその心象風景が右の大納言邸を取り巻く状況（引用Gの二重傍線部）に表れているとみられる。ここで注目されるのは、光源氏のこの二面性が「ゆゆし」「恐ろし」等を共通項として立ち現われていることである。細野はるみ氏は、平安中期以降に物語で用いられる「ゆゆし」と異界の関連性について指摘しているが、<sup>②</sup>古代の聖観念が〈齋忌〉を意味することも考え合わせると、右のような光源氏の二面性は、彼岸と此岸の狭間で揺れ動く源氏の精神状態においてもたらされたといえよう。

さて、このようにして引き取った紫の上を源氏は、「ただひたぶるに兎めきてやはらかならむ人をとかくひきつくるひては、などか見ざらむ、心もとなくとも、直しどころある心地すべし」（帚木・

六四頁）という左馬頭の発言を受け、「なかなかのさかしら心なくうち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばや」（若紫・二一三頁）と考えるのであるが、その根底には桐壺更衣に仕えた女房や典侍から伝え聞いて造り上げた母親像を基にして、紫の上を母の人影として再現しようという衝動が存在する。この母なるものを渴仰する源氏の衝動は自身、「わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど」とわが身を顧みているように無意識の衝動なのであった。

ただここで注意されるのは、源氏と紫の上との関係はそのような不条理なものばかりではないということである。右の引用に「いかで、かう人少なに心細うて、過ぐしたまふらむ」とうち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば」とあるが、『新編全集』が指摘するように、源氏は紫の上の住む荒れ果てた邸（蓬生）の宿を幼き頃の二条院（浅茅生の宿）と重ねている。実際、源氏も紫の上に関し、「同じさまにものしたまふなるを、たぐひになさせたまへ」（若紫・二一八頁）と尼君に述べていた。このことについて伊藤博氏は、作者が幼女紫の上を造型するに当たって「その境遇を光源氏と相似形につくり上げた」と指摘している。<sup>②</sup>また、大納言邸に取り残され、「いと心細し」と思つて泣く紫の上を支える乳母少納言の存在は、源氏にとっては「久しう対面せぬ時は心細くおぼゆる」（夕顔・一三九頁）大式の乳母に当たり、源氏と紫の上の幼少期は心情的にも完全に重なり合っているのである。その紫の上は、源氏すら「これはいとさま変りたるかしづきぐさ」（若紫・二六二頁）と思うほどの幼さを示しているが、「孤兒同然」<sup>②</sup>の紫の上に

とつて絵と雛の世界は苛酷な現実から逃れ、精神のバランスを保つための唯一の手段であつたと考えられる。原岡文子氏が指摘したように、源氏の幼少期にもその幼さが強調されているのであり、右の場面で源氏は自身の幼少期を紫の上に重ね、「あはれにうち語ら」つたのである。もちろん、この「あはれ」という心情には、「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」（若紫・二五八〜九頁）という、藤壺のゆかり故の屈折した恋心と、その奥に潜む母への思慕の情が存在する。しかしながら、小島雪子氏が指摘したように、紫の上を「らうたし」と思う光源氏の気持ち<sup>(27)</sup>がまた、紫の上という存在を支える大切な要因ともなつたのである。引き取つた紫の上の何心ないあどけない表情を見て思わず「うち笑まれ」る源氏の姿には、紫の上に対する光源氏の心情がよく表れているように思われる。このような源氏に対し、紫の上の方も源氏が帰宅すると、「まづ出でむかひて、あはれにうち語ら」うようになる（若紫・二六一頁）。と同時に、紫の上に異常に執心する源氏は、紫の上を「いとをかしくもてあそび」とみなし、「雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊」ぶ行為に及ぶ（同・二六一、二五九頁）。この両者の雛遊びは、結局自分を迎えに來なかつた父兵部卿官を思い出すこともなくなり、源氏を「後の親」、すなわち父親とみなして慕う紫の上と、紫の上の中に母の面影を重ねる光源氏の架空の世界の遊びなのであろう。しかし、互いが父親代わり、母親代わりとなつて人形遊びに興じる二人の姿も、両者が抱え込んだ寂寥と悲哀の然らしむるところであつたのである。実際、紫の上は

源氏にとつて「生きることの艱難をすべて忘失させるところの、かけがえない愛の対象であつた」<sup>(28)</sup>のであり、幼女紫の上を母の実家二条院に迎えて幼い兄妹<sup>(29)</sup>のように馴れ睦ぶことは、源氏にとつて新たな出発の起点となるべき創造的行為なのであつた。

紫の上を迎えたのとほぼ同時期に行われた前掲の紅葉賀での舞、及び「博士どもの心にもいみじ」（花宴・三五五頁）と感銘を与えた花宴の作詩に、光源氏は学芸における完成された姿を示しており、かつ帝が左大臣の後見のもとの源氏の成長を、「ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる」（紅葉賀・三三四〜五頁）と述べているように、源氏の元服から二条院へ紫の上を迎えるまでの期間はある種成人儀礼の意味合いを担つていたと考えられる。これに加え、「若紫」巻冒頭の場面が『伊勢物語』「初冠」の段を踏まえて、北山の聖の「室」（峰高く、深き岩の中）での源氏の「行ひ」も（一九九〜二〇一頁）、変型した私たちではあるが、源氏の成人儀礼の一環として捉えられるように思われる。そして、この北山で源氏が邂逅したのが「山桜」のような少女紫の上であり、かつ紫の上の叔母藤壺も桜のはかない美しさをたたえる女性であつた。従つて、藤壺と瓜二つの桐壺更衣も強いて花に喩えるならば、桜が最もそのイメージに近いように思われる。実際、更衣の「にほひやかにうつくしげ」な容姿、「なつかしうらうたげ」な人柄は藤壺・紫の上と共通するものであつた。すなわち、源氏ははかない桜の美しさをたたえた二人の女性に無意識のうちに母の面影を重ねたのである。しかし、厳しい冬を越えてようやく開

花した桜が時を経ずして散り行かねばならぬ翳りを内包しているように、藤壺と紫の上もそれぞれ固有の翳りを抱え込み、また源氏に抱え込まれる存在であった。<sup>30</sup>これは父按察大納言の意思を引き継いだ桐壺更衣の内包する一抹の影と相通ずるものがあるように思われる。しかしながら、幼児光源氏にとって母桐壺更衣は、そのまなざしに悲哀の色を宿しつつも、なお自身に対する慈しみをたたえる存在として映じたことであらう。

## 五

紫の上を二条院に迎えたことにより光源氏は精神的な安らぎを得、それまでは葵の上に対して非難一辺倒であった源氏が、それまでの自身の行為も顧みて葵の上に心を向ける余裕が生まれている。すなわち、源氏にとって妹の要素をもつ母のような女君紫の上は、宮中に住まう天上的な母の如き藤壺に対し、いわば二条院における地上的な母のような存在として、源氏に安らぎをもたらす精神的な支えの役割を担うのである。この紫の上と入れ替わるように、藤壺は、冷泉帝出産と中宮冊立によって源氏との乖離が決定的となる。この藤壺立后に連動する形で源氏が参議に昇っているように、次第に源氏にとって藤壺という存在は政治的な意味合いを帯びるようになる。これを母なるものの観点から見れば、藤壺は母更衣の就きえなかつた中宮という地位の具現者ということになる。つまり、源氏にとつて姉の要素を有する母の如き女君藤壺は、慈母のような存在であるとともに政治的な保護者としての役割をも担っているのである。

他方、紫の上との安定した二条院での生活も、源氏の須磨流離によって一時的に頓挫する。しかし、この流離の過程で出会った明石の君は桐壺更衣の伯父の孫に当たり、伊藤博士が「実は明石一族こそ桐壺更衣の血につながるゆかりであった」と指摘したように、明石の君との出会いは、血縁的な観点から見れば紫の上以上に源氏が母なるものと邂逅したともいえる。紫の上があれば明石の君に対する嫉妬心を募らせる理由も、この辺りにあるのではないだろうか。また、源氏にとって明石の君と結婚し、明石の姫君を二条院に迎えたことは、受領層に属する明石入道の経済的な後見を得ることにつながる。つまり、明石の君との婚姻は、図式化すれば母方の後見の喪失による経済的な後見の欠如を回復することでもあった。そして、紫の上との別離と明石の君との邂逅の間に源氏は宗教的にも精神的にも大きな変貌を遂げたのであり、<sup>31</sup>源氏の成長にとって母なるものが決定的な意味合いを担っているのである。

見てきたように、藤壺から紫の上へ、紫の上から明石の君へ、という源氏の遍歴過程は、更衣に近似した女性から母の人形たるべく育てられた女性、さらに更衣の血縁者（光源氏の再従兄妹）である女性との出会い、というふうに、徐々に更衣そのものの姿に近づいていく形で進んでおり、藤壺から紫の上へ、紫の上から明石の君へ、という母なるものの喪失と回復の間に源氏は大きな成長を遂げる。

この母なるものとの分離の間に、常に更衣の暗部をうかがわせる恐ろしい母として弘徽殿女御が前面にせり出し、源氏の試練を誘発し、結果的にその成長をもたらすことになったことも見逃せない。<sup>33</sup>そし

て、源氏にとつては理想的に母なるものを体現したのが、明石の君と光源氏とのあいだに儲けられ、紫の上によつて育てられた、明石の姫君であろう。この姫君が東宮に入内し、更衣と同じ淑景舎（桐壺）を使用するようになってからまもなく光源氏は准太上天皇となり、『源氏物語』は一つの大団円を迎える。と同時に、「天長地久時有りて尽くとも、此の恨み綿綿として絶ゆる期無からん」（「長恨歌」という更衣の怨恨もほほ晴らされたとみられる。

すなわち、第一部に限つていえば、『源氏物語』は母なるものの回復と開頭の物語であるともいえるだろう。つまり、母子関係そのものを詳細に描くのではなく、光源氏を母なるものを体現する女性と関わりさせることによつて、かえつて人間にとつての母なるものによりはつきりと見えてくる構図になつていてと考えられる。ここで注意されるのは、源氏と母ゆかりの女君たちとの関係が、源氏の無意識の衝動に基づいて展開されているということである<sup>(34)</sup>。この無意識的な構造は単に通時的な面にとどまるものではなく、源氏の存在そのものにも大きく関わっている。すなわち、これまで見てきたように、源氏は桜のはかない美しさをたたえる藤壺や紫の上に無意識のうちに母の面影を認めたのであり、二人の孤心が光源氏の孤心と響き合うことを契機として、それぞれと固有の恋の闇へと迷い込んでいくのである。この闇は、母を失つた源氏の底知れぬ不安と悲しみに起因する心の闇と表裏の関係にあるのであり、弘徽殿太后の存在とも相俟つて、源氏の心の闇は危機的なまでの深まりをみせる<sup>(35)</sup>。この精神の危機的状况において、一方で天上の世界へと開かれた源

氏の光り輝く姿が喚起され、特にその否定的な側面が怪異で不気味な（もの）として精神病的に立ち現われてくるのである。しかしながら、母なるものを具現する女君たちとの関わりを通してもたらされた源氏のこの危機は、同時に母ゆかりの女君たちとの間に構築される新たな関係によつて克服される。その結果として光源氏は成長を遂げたのだともいえよう。細野はみ氏は「須磨」巻前後から源氏に対して「ゆゆし」という言葉が使用されなくなることを指摘したが<sup>(36)</sup>、この源氏の変貌は、光源氏が更衣ゆかりの母なるものを回復することによつてもたらされたのではないだろうか。

注1 『源氏物語』の本文の引用は新編日本古典文学全集による。また、『古今集』の引用は同じく新編全集により、『拾遺集』の引用は新日本古典文学大系によつた。

- 2 鈴木日出男「光源氏前史」『源氏物語虚構論』（東京大学出版会、二〇〇三年）
- 3 鈴木日出男 前掲論文
- 4 小島雪子「光源氏前史と光源氏の生」『源氏物語』の始源的状况に関する考察1」（『日本文芸論叢』第二号、昭和五十八年）
- 5 鈴木日出男「天上の恋―藤壺と光源氏（一）」『源氏物語虚構論』（東京大学出版会、二〇〇三年）
- 6 杉浦一雄「源氏物語の源泉」（『千葉商大紀要』第三七巻第四号、二〇〇〇年）
- 7 今井章子氏の「母性について―「グレート・マザー」を中心に―」（『園田学園女子大学論文集』十九号、一九八四年）において、西洋のメルヘンではしばしば母の恐ろしい面を継母が担うことが指摘されている。
- 8 鈴木日出男 前掲論文（注5）
- 9 エーリッヒ・ノイマン『意識の起源史・上』（紀伊国屋書店、一九八四



- 年)において、英雄の「竜との戦い」の神話では、竜が個人的なものとして意地悪な父親なし母親のかたちで現れるとされているが、源氏を迎えた左大臣が弘徽殿女御を戴く右大臣家を圧倒したことは、ヤマタノオロチ神話の変型ともみられる。
- 10 姥沢隆司「光源氏像の定立過程―桐壺巻から若紫巻へ―」(『中古文学』第二十五号、一九八〇年)
- 11 小西甚一「光と暴風―『源氏物語』の家族アーキタイプ―」(『批評』第十四号、一九六八年)
- 12 源氏は空蟬・夕顔をそれぞれ「らうたげ」「らうたし」と感じている。
- 13 鈴木日出男「光源氏の登場」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会、二〇〇三年)
- 14 小西甚一 前掲論文
- 15 鈴木日出男 前掲論文(注5)
- 16 鈴木日出男氏は『源氏物語歳時記』(筑摩書房、二〇一〇年)で藤壺を木花之佐久夜毘売に比定した上で、「源氏は、いわば木花之佐久夜毘売のほかない美しさをかかえこむことによって、憂愁に裏うちされた繁栄の人生を歩まされているといつてよいのではないか」と指摘している。また同氏は、この場面の藤壺や源氏と管弦の遊びで心を通わせた藤壺について「源氏の孤独な魂をやさしく包みこんでくれる存在であるとともに、源氏の慕情をいよいよ狂おしくつづのらせる存在でもあった」(前掲論文(注5))と述べている。
- 17 伊藤博氏は「若紫巻試論―短篇始発説批判」『源氏物語の原点』(明治書院、昭和五五年)でこの場面の藤壺像と帝の回想の中の桐壺更衣像が「なつかしうらうたげ」という点について照応することを指摘している。
- 18 小町谷照彦「歌―独詠と贈答―明石君物語に即して」(『国文学―解釈と教材の研究』第十九巻第十号、昭和四十九年)と指摘しているが、本論文のテーマに即するならば、源氏の「ゆゆし」き姿を喚起するのにも母なるものが
- 関与しているとみられる。
- 20 この源氏の光り輝く姿は、源氏の心の惑乱状態にも原因があるわけであり、より地上的な意味合いをも担っているように思われる。
- 21 秋山虔「光源氏論」『王朝女流文学の世界』(東京大学出版会、一九七二年)
- 22 松本信広「スサノオノ命および出雲の神々」『日本神話の研究』(平凡社、一九七一年)
- 23 野野はるみ「ゆゆしき」主人公像の転回―源氏物語須磨前後―」(『中古文学』第四十二号、一九八八年)
- 24 伊藤博 前掲論文(注17)
- 25 阿部秋生「紫上の出家」『平安文学・研究と資料』(国文学論叢第三輯)―(至文堂、昭和三十四年)
- 26 原岡文子「いはけなき」光る君の登場をめぐる『源氏物語の始発―桐壺巻論集』(竹林舎、二〇〇六年)
- 27 小島雪子「光源氏と紫上―出会いから新枕まで―」(『文芸研究』第一一集、一九八六年)
- 28 秋山虔「紫上の初期について」『源氏物語と紫式部―研究の軌跡―資料篇』(角川学芸出版、平成二十年)
- 29 二人の姿に「伊勢物語」四九段の贈答歌を重ねるならば、源氏と紫の上の関係は兄妹のようにも見立てられ、藤壺と源氏の神話的な関係(姉弟)を逆にしたものともいえる。
- 30 鈴木日出男 前掲論文(注5) 参照
- 31 伊藤博「明石一族との出会い―明石・漆標」(『国文学―解釈と教材の研究』第三十二巻第十三号、昭和六十二年)
- 32 拙稿「須磨」明石」巻解釈に関する一試論」(『むらさき』第四七輯、平成二十二年)
- 33 恐ろしい母としての弘徽殿太后は光源氏の須磨流離においてより明瞭に見て取れる。また、この流離時に源氏は他界を現前させるような琴の演奏をしている。
- 34 古注以来、光源氏流離と海幸山幸神話の類似性が指摘されているが、

源氏と明石の君の、「さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしよし  
しう気高きさまして、めざましうもありけるかなと見棄てがたく口惜し  
う思さる。男の御容貌ありさまはた、さらにも言はず、…心苦しげなる  
気色にうち涙ぐみつつあはれ深く契りたまへるは、ただかばかりを幸ひ  
にても、などかやまざらむとまでぞ見ゆめれど…」(明石・二六四頁)と  
いう場面はホオリとトヨタマビメの「目合」にも比されよう。

35 このような源氏の精神状態は、ヤスパースの「限界状況」概念に近い  
ように思われる。

36 カール・ヤスパース『世界観の心理学』(創文社、一九九七年)他参照  
細野はるみ 前掲論文

(かとう・よしひこ 大学院博士後期課程在学)